
斧男

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

斧男

【ZPDF】

Z6035D

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

その人は、とにかく何かを切り倒したかったんです、斧で。だから、もういっそ木じゃなくてその辺りのもんでもいいかなって、都会に出てしまったのです。

俺は斧使い一段の腕前を持つ男。通称斧男だ。みんながそう呼び始めた。

普段は森に行つては、とりあえず日に付いた木を切り倒し、特に目的もなく薪を割つていた。

でも、やつぱり毎日同じことをしていたら人間といふのはいつか飽きるものだ。

いや……俺は斧を振つて物を切り倒すという行為は大好きだ。これはきっと死ぬまでやめられない。

ならどうしたら良いだろうか……と俺は考えて、すぐに結論が出た。なら対象物を変えればいいんだと。

そんなわけで俺は、意気揚々と家を出た。小さい頃から全く出向いていなかつた町に向かつて、自慢の斧を抱えて、気分は『機嫌だ。

町にいつたら、ここにもたくさん木が聳え立つっていた。なんだ、町つてのもこんなに木が立つているものなのか。

俺はそう思つて、その木を切り倒した。バコーンバコーン、ちょっと手応えがある。

「ちょっととちょっととちょっと」

ヒゲ面のオッサンが声をかけてきた。頭に黄色くて硬そうな帽子を被つてゐる。

「アンタ何やつてんの？！」

「木を切り倒してゐるんだよ、わかるだろ見れば

「どこをどう見たら木と電柱を見間違えるんだ？」

「電柱？ そんな変な名前つけてるつてことは、お前の木か？」

「いやあそうじゃなくて」

「まあいいや。俺一度切ったものは最後まで切る主義だから
バコーンバコーンと、俺はオッサンを無視して切り続けた。

「やめてくれえええ！！！」

オッサンが飛び込んできた。危ない、と叫んだがもう手遅れだつた。

「ベコツ！―― という鈍い音とともに、電柱といつ名前の木と、オッサンの頭が「ひつんこ」した。

「うげえっ」

「じめんよオッサン。でも突っ込んでくるアンタが悪いんだよ。人が木を切ってる時に近づいたら誰が見てもそうなるだろうに。」

なんか赤くてチカチカする光が見えてきて嫌になつた俺は、次の木を目指した。

「今度はぶつとい木があつた。しかもすんげえ高い、すげえなあ。
「きや―――っ、変態よ―――！ 人殺し―――！」

その木の中から、女が出てきた。本当に失礼な奴だなあ。俺は誰も殺してねーよ、怪我はさせたかもしんねーけど、アイツ自身の不注意のせいだ。

ムカついたからコイツが出てきたこのデッカイ木を切つてやる。
ざまあみやがれ。

ボコーンボコーン、おお、これはすげえ手応えだ。切り甲斐があるなあ。

「ちょ、ちょっとアンタ何やつてるの？！」

「お前がムカついたから木い切つてんだ」

「アンタ斧でマンション切ろうなんて馬鹿じやなーい？」

「マンション？ 最近は木に名前つけんのが流行つてんだなあ」

「ちょ、ちょっとアンタ大丈夫？」

「俺は斧使い一段の腕前を持つ斧男だぞ。こんなもん楽勝だよつ

ボッパーーーーン、ガラガラガラガラーッ。

マンションとかいう大木も、この俺の手にかかるば、渾身の一撃の下に崩れ去つてく。はつはつは、気持ちいいなあ。

「いやああああ！！！　まだ隆人が中に…………！」

女がうるかつたので、俺はさっさとその場を後にした。しかし、あんな大きいものを切り倒すなんて初めてだから、スッキリした！――

次に見たのは、赤い色をした、天まで届きそうなくらい高い木だつた。

しかも、中へ向かっていくらか人が出入りしている。最近はみんな木に済むのが流行つているのかなあ。

まあいいや。こんな高い木なんて、この斧男からしてみれば、立派な対戦相手だ。俺は再び斧を抱えて歩き始めた。

「ちょ、ちょっとアンタ何してるんだよ」

するとまた変な奴が呼び止めてきた。子どもと女を連れている。しかもへっぴり腰だ。

「またか。都会のモンは斧も見たこともないのか」

「知ってるから怖がつてるんだろう？　銃刀法違反だ！」

「俺と斧は一心同体だ。なんか知らないが違反なんてしてねーぞ」「じゃあアンタ、何切りにいくんだい、それで」

「当たり前だ。そこにあるでつかい木だよ」

「東京タワーを？！」

そいつはびっくりして腰を抜かした。本当最近の奴らは木に名前つけるのが好きなんだなあ。

「これから俺達はその展望台に昇るんだ。なんでお前にそれを台無しにされなくちゃ いけないんだ」

「つるせえ、これが俺の仕事だ。とにかく俺は切る

「ぐ、くそお」

そいつは弱々しく辺りを見渡してから、地面に落ちていた斧を拾

つて、俺に襲い掛かってきた。

なんだ、都會にも斧があるじゃねえかと思ひながら、俺はそいつをガキーンと受け止めた。

何い？！ ところの顔をしているので、俺は斧の柄を押し付けてソイツを吹き飛ばしてから言つてやつた。

「俺は斧使い一段の腕前を持つ男。それに数え切れないほどの木を切ってきた。お前みたいに昨日今日斧を持ったような奴に負けるかよ」

「ぐ、ぐそあ」

「もう、だらしないなあ」

といつて、横からそいつの子どもがやつてきて、斧を両手に持つた。

なんだコイツ、俺とやろりつてのか、ガキの癖に。

「斧つてのはこう使うんだよ」

といって、ガキは俺に向かつて斧を両手で放り投げてきた。俺は意図も簡単にそれを避けた。

馬鹿め、そんな力の斧でこの俺が倒せると想つなよ。

ザクッ！ という音が俺の後頭部から聞こえた。この感触は、小さい頃親父が間違えて俺の頭に斧を刺したときの感触に似ている。もしかして、と後頭部を触ると、やっぱり斧が刺さっていた。馬鹿な、斧が返つてくるなんて！

「ま、まさかお前……」

「斧使い免許皆伝ぞ」

「上には上が……ぐふあ」

そして俺は、意識が遠くなつていった。執念で意識をしづらく保つていてると、あいつらの声が聞こえてきた。

「よくやつたわね、タケルくん」

「通信教育で斧使い検定とつておいてよかつたね」

「す、すごいぞタケル。さすがパパの息子だ」

「コイツア、ちくしょう。俺が悔し涙を流していくと、後ろ

からギギギツという何かがスレる音が聞こえた。

俺は、最後の力を振り絞って起き上がり、後ろを見てみた。

「パパごめーん。後ろのタワーも切っちゃった」

一つの大木が倒れた。犠牲者は奇跡的に四人だけだった。

(後書き)

放置していた小説を書き上げたもの。オチも弱く、いつも以上に意味不明。なんか図らずもいろんな意味で社会現象を皮肉つた形になっちゃったなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6035d/>

斧男

2010年10月8日15時53分発行